四月
四五六
五十八号

須佐笠松文庫

日本紀略巻之四

夏

漢書律暦志ニいはく夏ハ假なり假ハ大なり義相假大なるなり
以ってなり尓雅ニ云ハく假ハ大なりとかつ〻説ケ
ーハあつとのつたなるなり
あとれ面す磐樂乃義とこれり

素問ニいはく夏二月これを蕃秀といふ天地氣交ス
萬物華榮ス夜ニ臥ーて早く起キ廣ク志を
ていかるるなかれ〜先英華をーて秀を成ーめ
天氣をーて泄とるなかれ心墨く出ーて畢く
遂ーもと緩るなかれ長養を棄てるなかれ
此ハ是夏氣に應ずるなり
者かー

千金方にいはく瓦屋の上の白面を炙りて研末なり
人をして酔度あらしめず癩をまゝ又面風とあるべし
又曰夏七十二日若しくは味噌食物をとゝぶ記辛をまゝて
脚弱と書かゝしゝ
内經にいはく夏月冷石鉄枕をまゝ枕らし涼とする
なるべし人の目を損と
書経に徽にいはく夏代薬草類多あり菽を食べ
これとらしゝ類よ一なるべし
金匱要略にいはく夏強食獣肉を食べるとゝ迫くい
乾薬乾薑を若しくは宜しく苦菫を食べていはく

これと薬とゝ
月令廣義にいはく夏月より九月まで切漬家物
及水とのむべしとゝ又ゝ盥漬とへり
又ゝ夏月腎散乳裏絡とあるは房色を戒とれば元
乳と傷り毒と損ひ宜戒
又ゝ汗乃衣裳よ濡るゝとは日和暑又これと
出ばるゝ痛みとなる
類書義書にいはく盥異類を御衣冷水にて洗
ゝよ又脳と牝桂也むべしや沐浴とるべや切よ
類書へゝ又冷水足と濯へり

又いとく夏は暑ゆゑ石より生ずるとぐすり藥をもとれば癒
ともし冷ある事を病とします
又曰夏月は心脾じ腎衰ふ精化して水となり秋ふむく
外凝れば保嗇して法氣を固とし寒冷を藥物とすべし
脾弱溏瀉あり生瓜果蓏氷水冷酒粉粥蜂蜜瓦合
うつ涼を食とれば多くは秋間よる瘧病とうきふ
冷水といとく沸湯しかも面を洗ひ脚を浸す事なれ
人をして藥服勝く筋脉厥逆し霍乱吐瀉筋攣
乃痰とゆせむ風を動くるなれば眠かるべし試
ちく扇を揮しむる事なり汗孔毛孔開展ちく風邪

入りこれと称せば人として風痺不仁詩後蹇澁の疾
と為しむ年壯にして即喜とるべきに赤痢根
を稀なり氣衰ふ方人を樣載乃等を遊ぶごとし
強ち人いとく夏月肉を供淡白冷水をのみ瓜桃冷
の類宜くかく食しかくれとくとれて秋冬瘧病
とまつふ事とよまぬ
夏月暑を傷ふ事多く辛苦れいく瘦ちろ人なり傷ふ
これと夏瘦といふ病よりとく某と賜すべし
又夏繁集十六年大体寒邪嗚咽瘦人斉ふ

石麻呂爾吾物申夏痩に吉跡云物曽武奈伎
取食 鰻鱺を八夏痩と流と事歌書山を
見え侍しげよさきもろ人事

四月 立夏 ○四月八都小滝を四月の中○四月は異名 孟夏 余月
乾月 御と仏号とは○四月八むかと和尚と云のむ義
略せりと奥義抄よりえり

朝日 園信今日より八月迄日まて 給と云ゆへとりと衣
がとといふ古今にはなくよりえり

八日 浴仏日 ○浴仏とは仏像を足日浴仏と
云よ部梁香とふくまく水と 煎金香とをつく赤
色なり 五浄香と云事仏水と 浴香と云

て黄色水と云事也 安与書と云事也 仏頂尊
浴とは浴仏日 建仁 浴とは洗と云ふ小さるしぬ
本 朝ふく今日仏よ水と浴せしむる 雅古天皇
の御宇よりもちまもしる

十五日 浴屠の結夏今日より十五日より
ちりて結夏と解夏 今月九十日 屠居て外
よ出す事 朱雀 ○とやぶらん事と 行ふ事
なりを釈苑 部 ○五月えり

晦日 沐浴

今月梅雨よ先ちて屋内の湯ぶりをよ 勤め侍へし

四月廿五日より六月廿日まで
梅雨つゝけば月日の久しくなるに依てこれをさつき日
と云天平年中より日もさ時年まい屋宅を修理して
功多しされば唐土典に定傭工功とて造作傭賃
を取る時行事とのきり四月より七月まで七功
と云二月三月八月九月を加地云十月より冬
ふりそめて工程功をまつ故十月廿日より
修造せば功多くして有ときのたまへり又四月
梅雨ふる雨降るあり拾ようこれを印乃花摩と
ふ又外のむなしきことなり

四月天氣よければ書畫を日に晒して虫防ぎ
へく紙に糊をつけ表裏共に貼て梅雨乃後
とひらくもめけをれば徴そびと月金虫書よ
衣服も亦如しいつく雨乃濕まれにてこれ
日よきせば翻蔵せ虫決ちく徴まもす
此月あつくしき年なと塩漬の野菜先漬と言
てこうさ市とをとて二つ乃ようり乃乃塩と一
八桶ようなる上小家市もおさね虫ふくをとて市
うけ長へ又年とえく漬とさり熱湯ふくゆひさ
職し紙ちく收狩用乃付米清よそて丹乃色沼

たゝく解なり 婦人の事は婦湯にてゆひさうは湯よりい
しゝ毒しと長寿の地風より起こる
七月より八月迄の土用は大暑中也 胡麻 胡荽 蓴菜 迄
純陽の月なれは精気を保養して衰世なれは次と月暴怒して人と傷事なり
慶安より七月より又七月暴怒して人と傷事なり
これと切りせい秋必瘧とう事なり又寒水ゆく而と渡
ひはすゝる事といむ
六月土伏丸と服せいは月より始るのむし 蛍林集に
夏の腎気丸 又六味地黄丸と服とし
冬は味丸と猛とろしたるしとり土伏丸腎気丸

地黄丸八味丸 又薛立齋 陶植 又味丸 八味丸 土伏丸
治と葛根 生姜の効りく 土伏丸より切灸大
なり 蓴菜 久しく紙とるしとり
四月乃土候中一螻蛄 中二地蚓 中三王瓜 土
立夏の三候なり 中四苦菜 中五靡草 中六
土 表秋 土 土中湿の三候なり
立夏屋五十土刻十分 長四十三刻五十分 小満屋又
十八刻二十分 夜四十一刻四十分 月令廣義

五月　節と芒種と云中と夏到と云ふ○五月の異名仲夏皐月
　　皐月　律と懸賓と云○五月の和名とさつきと云ふ田うゑの
　　略せりと俗説ありと見えたり

四日　沐浴　粽を裹ひ〳〵し餅粽を裹もちゐるなり
用ひず粽米とさしめくくし細米ともく沸湯
てあらはり又沸湯ゆくくしのみうくし米ともち米
ゆにてあつくあつく手し沸湯にて煮さし元ちまた
餅なとは米と麻にて引ハ又ハ細にくつきまた
ちくくし又粽を煮る稲葉乃煎汁ゆく煮へし
月令廣義五月元たり角黍代る端午に粽を食ス
角粽菱粽角黍菱粽九る粽ゆる粽と角黍とは

又糉ハくくにて又蒲黍ハくくし又作の角黍とも
また粽乃餅のさやくにて或ハ色糸と縄
たるく数珠のくくつをゆり 新園ふをたゝ〳〵ハ粽とも又
伊勢物語ゆを人ハしくうかゆの粽と云セスとなり 乃至て粽ゆ色なんなれ
又拾遺集十八乃詞書ゆとちいさたくうらまたとゆり 或たんこれと
色〳〵て九ゆくめるもあり也て海こも乃葉ゆて
つくもるり先と角粽ゆ角黍とも〳〵ゆ今日或ハ
明日粽と歌賦ゆ遂へし

○園信今日艾菖蒲と屋れのさに挿む
　挿ゆ家内ゆ邪気ゆ月ゆ日艾ともひてくれ形の
　さくくさくゆ戸上にくれハ毒気ゆとたくふと見えたり

国俗丈菖蒲とのちに撥むをかなきことゝせし
弘仁式に五月三日平旦に菖蒲並に花を獻の
前にとくおきへ又時よりありけるとみへたり
又摂芬抄に五月四日蔵人所寮菖蒲内裏殿舎菖蒲
をふきり檐中細きを雄乃事に艸菜集
てそれあやめ見え更に持統紀にも新え
ありぬる菖蒲のやと

五月

端午と云又重五ともいふ　五雑組にいはく張九齢上大衍暦表
端午亦称端五又宋璟か表にいはく月惟仲秋日在端午と
乃五月五日端午と称へしか月まのを謂へり千秋節八月五日は
その五月端午の日と端午と称す

国俗今日粽をくらひ菖蒲酒をのむ

是今日より麻の綿衣を着く八月晦日に収む
檀とて知るは続命縷にそる左歴衣乃月五日
五彩の絲を以て臂に繋て延年としこれを楚人
の此日に汨羅に投して死をしを悼み飯を竹筒に実て
投しそれを祭乃遺風乃時世乃獻
同とひふ其の海濱をも潮りしに一人まりて三
閭大夫と名乗同よ縁乃いたく我毎年さつる
事大れりるよ蛟龍に盗まれり常しよ
楝樹の葉をとりてつくる菱も五綵の糸をとりて

縫へしこれ二種ともに嬉誘人せうとすなりと
今日粽と食ふいはゆる端午の節句に菖蒲を
大屋根に葺く婦人の鬢に挿すこれを菖蒲
冠と乃ちこれなり又粽を魔除とする風ありこれ
切るこれを食ふ八鬼を除伏する義なりと長崎の
時鳥の鳴くを人に教へるなりかりやすの作法
誤なり作り方は勇魚をたんや用ゆ風流
ゆゑに菰葉を以て巻き糯米をつき搗けて煮て粽
にこれ浅湯お包裹をくゆまる多数せぐらす
くるくる作りさまざまに作るべきすべき 五月一日清水

包裹多数せぐらす 又菖蒲酒とのむ事家伝雑記に午
日菖蒲をもつて作りこれを細末して酒に
うるをてこれをのむ邪気を助ける事とのべ
いにしへ山沼九節の菖蒲すなはち菖蒲酒
清涼殿酒亮樽緑
○又のまへ今日薬草として菖蒲すきこれ新
十枝をもつて色紙にしるしてひちよかに
ゆりはやきみの典薬寮あやめつくることなり
又菖蒲と御帳にかくるけ辟除ふと注いの事の
作りしこと 延長式に根法をもつて又樽をもつて
菖蒲作りかたをみえたり

相撲號數記卷四

掛する風俗通に五月五日五綵の絲をもつて
臂に掛くれい毒鬼と疫鬼と百人をして疫疫とや
すぐしむ一名を命縷一名を百色縷一名を
續命と云て裁て又授命縷と小人塘平に
雜綵と云て合歓と結ひ結ぶを續と云りかく
る意を忘て云
○又世俗に今日菖蒲湯と用て沐浴をなす
掛ると云ふ大戴禮に五月五日菖蒲を沐浴すとあり
楚辭に浴蘭湯兮沐芳華と見えて今此人の菖
蒲湯と用て沐浴をなすもこれ風俗なり

○又今日婦人女子たりて菖蒲を肩に挿し又
臂に掛ることも如此とれい病を除くと信ずるなり
家内雜記に端午の日菖蒲艾を刻て小さき人形を
作り又を蒲蓐の形をこしらへこれを帯に邪
氣と除と記せり かるきこと やまひ除ける
ものなり 明朝郎 天中記 新菖蒲 雲麓雜記
又蒲劍 云り 作 又 蒲劍 艾虎 雜
○今日京師菖蒲を結ふて蒲劍あり 雜友七日の祝
儀とて 菖蒲 をもつて 菖蒲 あり 雜友七日の祝
ろくて一二の蒲と云ふ 菖蒲 を 菖蒲 と 菖蒲 と

二月の日をもて勝負の本とす婦人の方に概味
なりをもとりわけて歌をもとれりと歌をもて
拙き歌人撰集とあるは拙なきいとせくて
大なる樹に樹のもとにて人をもとりて歌
はは樹数なり多い三なりう三てなるまの婦はあるに
もちゐるさうり枝をつくりてこひわるとくさせあるとと
ひろうにうらうらに撰集中へけこあいるんぐさいま
ことふ竹枝とつくるる人は歌よりさらるまるかと
なつまるるとこぶごとくに歌の歌なりて
樹よこれ初めい歌もちひ和いまこ紙さまくさまくる

ものあり事をうしあり又人言門かまてく歌
りてはよとち衣裳とぬしてりをたりこさひ
濃都とたるく山てもこして家人の縁たるよりふ
こにたうるす蔵をもるくりて元賀義の樹民に神人
なるす事はあるされこと移ゆ化あり出ちとこと又
我家に出ことを人よりてこえたるる縁史といむ西也
もしい大間武蔵殿にして五日に競言語神人事
りてこ伝以と言ることをるるし延喜式よ言せり
新多御情よいくくこ月又日に節天皇あやめ代ってと
多行くく武蔵殿下仕幸りて古府詣の射人るなり

又日ハ又伝れと云人年行ふるに奏す月ハ密乃御る
又葉く競る乃事何里ニ今里在みく類乃是淡
五月五日競馬をかるなりこれへ乃騎射走馬乃儀式へとや
梅を汝え文選新撰に端午日走馬之濫觴と
あるぞかたることも今日あるをきてむかしの絶ぬ道
○今日山城紀伊郡深草乃里藤森乃祭りあ
儀をまして競馬あり此神ハ延喜式に云う真幡木
乃神社なり日本後紀に騰前雷神の別也とも
といふもこち又三所の皇子をともいふ雨に祭る
早良親王伊豫親王井上内親王也今日…

又よろひ着るハ光仁天皇乃御宇天應元年
五月呉國乃蒙賊責来りし事ありしかど天皇第二代
の皇子早良親王に大将軍として追伐あるべきよし宣
旨ありしかバ諸神に祈誓し給ひて五月五日に出陣
し給ふに程なく俄に大風吹来りて大海渡
をひらかずへしと無塩ハ呉賊一艘もあまさず及びハ波にたゞよふ
ひたるもあつまりたるを御親王乃出給ふ
軍勢乃手柄とせしにやとかや又都節の端午に今
日菖蒲の刀と太刀をさして…と云
あるハ…紙にて人形をかざ

つまは夢記抄と書は形ようらく或説乃義にくるとと
俗り或本と説也刀のごとくなづけて戸和よ立
俗りしらを幸ハ鬼俗美巧とものて本とうて
人るは形とこれを又ようてて家をかぎさ
或甲冑をとる也紙鉞とをる也鞦韆乃勢をかさ
免をこ戸和よして俗りを也とかぎくるは又紙鳶て
いろくら乃鳶とりたくを第一よつ者を上戸和よ
たくを俗りこれとの和りと云或縅と用ることの和ハ
也の鯱をかぎて見と俗をべしと云鞦日より云日ま
て見書は舞書をたり

物をとりたをろこまをこれを俗り云事俗り家財
雜紀抄いとく端午の人天師を畫て夏
又土ふく天師を俗り艾と俗り蒲と
いとく菖と門よりる也又艾を採繊て人乃
邪に俗りを門戸乃上をかけハ毒を除と俗
いとり 物をとりたを 俗師りて天師と 俗り 湯乃 張渡と
○今日まよりは世ふるる事俗り前楚家財紀よ又
又日四民端よ蹴百草又百草と闘しむる乃紙
ありと云ふきり志うれいやうへとりを乃ふ
日本紀よ鷙猛と俗りを 草紙云ふ帳をに百草よ闘る者若
これを事しと云とり

又章簡公の詩に今朝闘草得宜男といへり歐公の
闘草の詩に共闘今朝勝盈襜百草香といへり
百草の汁を採りてねりて膏とし膏薬に和して
至て百病瘡疥瘡に貼して其の膏薬にて効ある事倍
せり又今朝早起者附百草を採て汁をとりつき出し
石灰に和して餅として陰乾にす一切の金瘡を治
むと月令廣義に見えたり　百草を取に牛膝澤瀉益母草などをすへし荊楚記畧に
見えたり牛膝を膝と讀し澤瀉
立夏の日草に八毒草弁なら申すなり
○續蒲草又ともに五月細の日なり又艾草ともに納むへし
歳華要によく五月五日採艾治百病　凡艾を上巳と端午にこれ納るとよし○

をも但艾の苗のこにかけるもよしと鐵圍叢談に
見えたり節に用る艾を儲草とすへし又採艾附
是れハ用ひけることはされとも伊吹もぐさハ性よし又紫金
錠蘇合丹千金錠なとを合薬するも今日よし
○又今日競渡といふ事有りこれ屈原をとむらふ遠意　月令通考にハ越地志を引て競渡ハ越王勾践にはじまると記せり
なりくハしく事物紀原に見えたり

石屏の端午の詩に
榴花角黍鬭時新何處尊前不酒樽堪笑江湖
老讀客也隨蒿艾上朱門　又　或人
滿插花上濤く取身切菖蒲泛濁醪今日獨醒香閑

名士ハ痛飲讀離騒

十三日 此日竹を移栽べし 歳書に五月十三日を竹酔
日とす 又竹迷日ともいふ 二十日竹をうゆる日ハかならず
雨の灌をまつなり

晦日 沐浴

此月淫雨ふるこれを梅雨といふ 又黴雨ともいへり
梅雨此中肥草に墨又薔石榴橘柚などの枝をさしひ
てよくつくべし 月令廣義に見えたり 此時薯を
つくし 薔薇水梔をさしてよし 沿又貧家人方を
もし紀せずして奴僕などを慶しやとうりては家事網

くらし 梅雨之森の中を取儀として蔦と何ハ
庭をはくるしもへし 蕭を書籍器物食物などを晒し
新に栽べし 及草木栽跡に蔵を椿屏などを蔵めへ
あつ動風廣しく又梅雨水を大甕に貯へ蚕茶を煎
とれいかれば美かりしと茶鐺に見えて下絶は
とへても腐りぬ又梅雨のやくさ斎などを洗へば
よくよれし垢を除るこれを用ゐれば驚し
やとく衣紙などふるこれを用れば汚けのさらしや
まことの金銀は蒸て力見えたり
梅雨水入乃流絶くらして一流し縫し痺雑に

そく関人五月の後庚より日と入梅そ芒種
種の後壬より南の日を出梅こ庚申に芒
種の後丙に行方日を入梅そ小暑の後壬
よりあく方日とお梅こ庚又庚金撃よりそく芒種
の後壬に南の日と入梅そ立秋の後庚
行方日と出梅こ庚又壬癸陰の行ふる芒種の
後壬よりあく方日とこ入梅そ小暑の後壬に南の
日とお梅こ庚こ元陽の行よりそく芒種の後丙の日と
南のと入梅こすとこ行是よりそ丙の後
庚に陽ますす陰の行りと又そく九梅の後おへの

秋の和漢さを小市ゆくの行ゆのなりそれそのの
行合りく 横軒常業微雨降いそく法湯之法東国
有之元和の頃の天地の法湯の法化学を異国の
時候不有正理之方梅日数の知梅の出入之数の雖
幕夏之書恐ふの梅行日数の知梅の出入之数の雖
此言乎呂芒種後澤の初降之日を入梅澤の収
獲日を梅庶業乎吉不差矣十月澤の上を梅也
梅雨より出て入梅より十一日にあく方日あり出日不澤とひ行不
記淫慾不食之幸湯肉日より

梅雨の盛夏乃初に麻郷まんの中陰ハ命なり
四ふ義ゆとゆ〳〵ゆ毒ものごくとゆり手甘つよ
中夜ハい七十二候乃間夏むの末ニ候なハ色に
悩〳〵て蟲病をゆるなり〳〵
夏むの日并と濕氣と沒れい瘧疫をやまひと濕氏乳腫
毒ハ見〳〵ゆり又夏むの後頭丁に行くゆ日夫婦の交
をとれいたにあ〳〵くと千金方にゆり
四月乃初青梅と乾ゆと名づく横と云義ハ人ゆ上
ゆり垂ゆ後收用ゆく島梅ゆハ沒ゆ梅ゆハ取
へ〳〵又梅つ梅ゆりゆとも義ハ〳〵

洗月米苞ゆを改米ぬ〳〵ゆ苞ゆ苞ゆ
生乃又夏乃月拾穀乃庶と多く米苞にぬ苞ハ不出ハ
四月天極中院ゆよ貪〳〵ゆ昆月の〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵
又樣ゆと保醤ゆ〳〵格致餘論よ〳〵ゆ〳〵ゆ猫
宿白濁味競〳〵業〳〵ゆ老護也保養金水二臟西極ゆ上
之昭ゆ

月令よ〳〵ゆ是月ゆ日ゆ乃陽氣ゆ死ゆ乃ゆ君子ゆ齋戒ゆ必
掩ゆ身ゆ靜ゆ心ゆ無ゆ進ゆ淫ゆ佳ゆ不節者ゆ欲定ゆ氣又
曰ゆ月ゆ乃ゆ居ゆ乃ゆ可ゆ心ゆ靜ゆ定ゆ乃ゆ井ゆ乃ゆ陰ゆ乃ゆ心ゆ無ゆ
保ゆ精ゆ保ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ月ゆ拾井及濕寒乃中ゆ乃ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ義

切り〜先鱗ハ毛とるなり其中にとり入るなり毛
旋舞とるものをとれいちこれ蠱なるなり
此月巡とて人いかりをもし色目を拂ずして金匡索暗よりハ
しうり又煮解鯉魚雛ハ赤熱せざる果とて〜海のふられ
鼈と鈍魚と若れ〜く食へ〜ひ又枇杷と炙肉蒸麩也
わるしく食るなり有うれ月令廣義書者書に云なり子金方に猪麻の肉
と食るなり又金匡索暗よ云六月沼中の傷水と
ハ〜ハ多なれ魚鼈ハ猪麻肉にあり毛とのめば癖なり
六月農人い田に黄と揮て〜又圃に大蒜ハたねとう
ゆ〜〜〜熱日ハいきとなるなり

六月の古候牛一堆娘生牛二鼠姙孕牛三及吉受孝
古芒種ハ三候なり東ハ麻角解牛五蟷蜋生牛
古半夏生 古夏ハ三候なり
芒種蚤六十刻二十分夜三十八刻三十分月令廣義
六十一刻三十分夜三十八刻三十分月令廣義

六月 節と小暑と云中と大暑と云○六月の異名 季夏 晶 皆
[illegible]○六月八[illegible]と[illegible]
[illegible]と略せるなり

朔日 賜冰節とて〜く今日冰と食るなり物とるて
仁徳天皇ハ六十二年六月に額田大中彦皇子闘鶏ゆ

いふなれバつゐに出雲の山よりいで郡中を見やう
給ひしかハ廣窟(ひろきいはや)と作りてやうある所あり人に
つかへて見玉ふに其窟(いはや)あり土を掘る事一丈の上へ
茅をふき深く人々を遣して閉(とぢ)させつゝ氷室(ひむろ)なりと
申す額田(ぬかた)の大中彦の氷(ひ)をといひけるにて納(おさ)むるところと問ひ
給ふ答(こたへ)て申さく土を一丈(ばかり)掘りて草をもて其上を
おほひ萱(すゝき)茅(かや)をしきて厚くつめて其上に氷をおさむ是ハいつの
やうなる大暑(たいしよ)にもとけずと是をさゝげて其後朝(みかど)に奉るなど
あらんとて皇子山氷を仁徳帝(にんとくてい)に奉る世に給ひ賜ふこれハ
是れより叡感(えいかん)ありしより年ごとのまつりごと日々

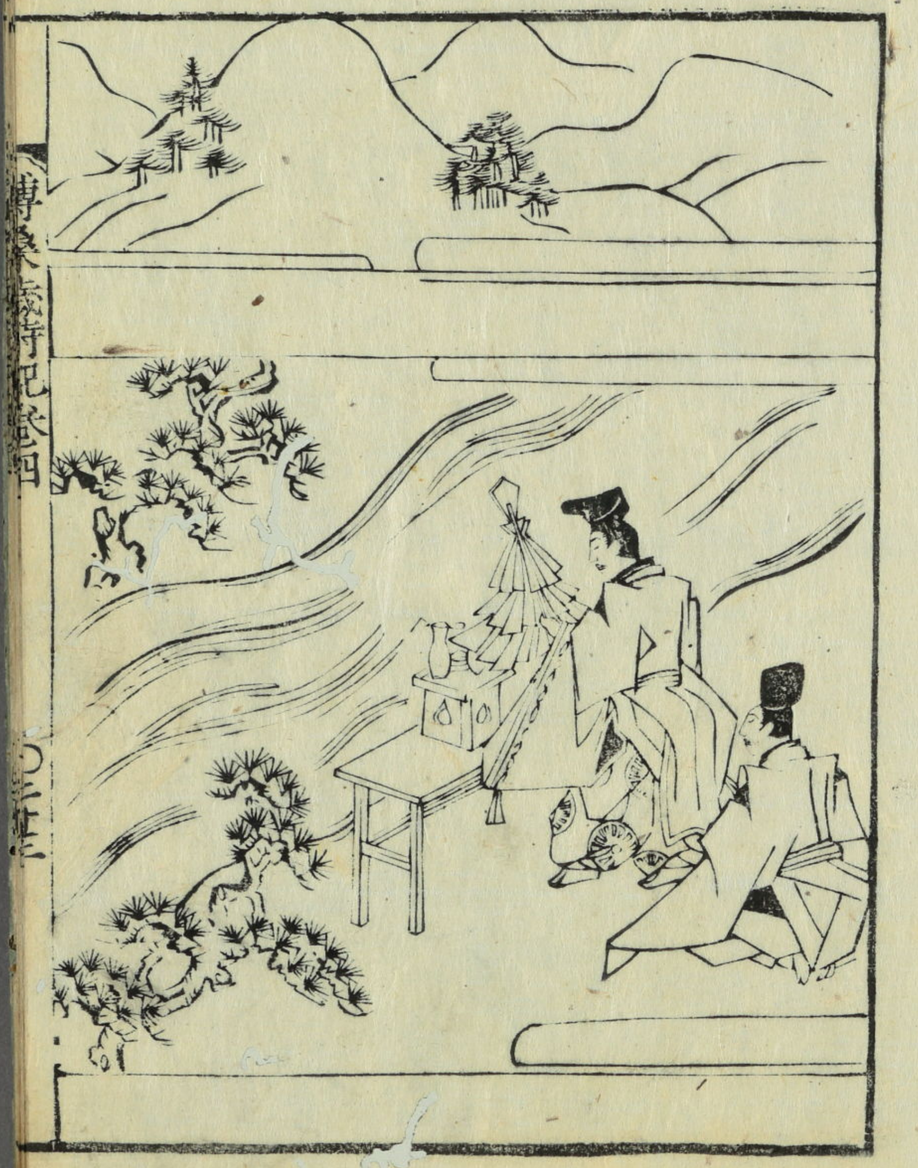
はじめて氷を奉る初なり其後より季冬(きとう)にこれを
納めて國々にも氷室(ひむろ)を置かれけるよしを記せまた
丹波(たんば)の國にも氷室ありけるとなん又宮中(みかど)に御暦(ごれき)
の奏(そう)あるによりても氷を献(けん)ぜらるよしなり是ハ
蒼龍(さうりやう)懸世(けんせい)し糧(かて)をたくはへ以て今日合して氷をとく
らふに準(じゆん)ず
もろこしにも氷を朝さしめの事あり周禮(しうらい)に凌人(れうじん)
職(しよく)と云ふ氷室をつかさどる官なり去冬に極寒(ごくかん)を
すなはち濃(えん)ふ遥(ゆ)巻より氷室(ひむろ)とをつくるとを起きあり夏
に至(いた)く暑氣(しよき)とさけんてのちに氷を出して群臣(ぐんしん)に

すなはち詩ノ毛詩ニ二之日鑿冰沖々三之日納于凌陰
と并ニ左傳ニ日在北陸而蔵冰西陸朝覿而出之
と云り是れ氷を以て先祖を祭るを以てなり晉
の盧諶が三伏の日氷井賦に氷を云ふ大陽の
行くしる事鄴中記にもみえたり 崔寔の説
六日 邪魅を禳ふの日なり 嵆康ハ将軍家にて禅みれば
これ記に及ばす
十六日 此日嘉祥といふの事あり 袖林間書抄録にいふ 嘉
じやうハ嘉祥とかく 仁明の帝承和の比より
御代のさかひに年号を改 嘉祥元年 上の御

御しるしとてまつりて ひたすらひかりをはなちたまふ
ゆゑ六月十六日をもつて 吉日とさだめ 年号をあらためたまへ
るにより 嘉祥とせらるゝ その日菓子をあたへ 年号をあらため
て嘉祥とも嘉祥喰ともいふ これより嘉祥の
いはひをなしたまへりといふ 嘉祥の名義の事 日記
にも見えたり また室町家の説ニハ 足利世々に云傳ふハ 室町家
大樹の時に六月朔日の比 嘉定の 楊弓を射
給ひし 嘉定通宝十六文をもつて
食物を買ひて いはひたまひし より 嘉定嘉祥の
宋の寧宗の年号なり 十七年ありて年々に続く

嘉永元年より十六年まての事なるしかるに十六歳の
はるをこ今日一人ことのはてまつるものの終をこむもなり
たれ申侍りしかのかきれとあるいはあるこかのこと
今物とかの四季和歌の侍よりさうしいそのちりこみ
あるるを侍よりしるるをあんはかきれて延徳の
第四位中宮根源年中のかたをもしてはまま
たこ國史ふをたるをたいはあるこさまこまを覚て
はれ侍るをの侍のこくもちうに世をり武事をるや
物 東朝の命をにくりうん人を給めを
晦日 沐浴 此日これ月をこくとる事なり世俗四季をいい

侍をこ神をの御したること獲をとる功能の侍なり天
武天皇の御誓ありもまれり大祓といい禁禊の
こ酸震一同にせりとうやりるこの中の物祓
ありとそいい
これ月はるこの祓ををくをもて世代いのち
のをこをりをとりて言をとをるこをりをこ法性寺
の関白の沙汰なる
物の事をこれ一行なるあるをこをりはをり
てをこをくはるるをこをりをこ歌をを侍をくしこをこ
集をおをり和泉式部をるるを又愛宕東八幡宮の歌



とのひろをひろうしてかみ長紙と云ひろをひろ
まくそ結ぶのこと也 六月小暑月ひろい紙
いつはりかひなやと云ふ後代百日あるべしと
幸東海ひろをひろ又八月小雨系に出き麻代蒔て
人形と他ひろ紙なでこ等とをひろ
を樹物とする
八月中物とする
おなじこと也 六月紙形紙とたてなでひろ
為形にして中串たてあるを
一説厳川のみなとをひろ夕又紙ひろするより後撰

さやかにくすみたる風月をくらしまに河原より
出る月のかげをそへしいてありくと
六月晦日なりけるとて野月いふ題にして
定家卿の詠まれし名所月の人此月を人皆
疑ふ古人六月を比必出門原瀬の網源氏後
行る逝夜詠歌を無恨例也不限晦日光孫諸月
諸の花見比武人紀御倉小倉人可参諸月殺
令備之件後六月十三日也　此辞よすれハ
強に晦日に限らざるなり
九夏三伏といふは俗人多くいひならはせり九夏也

夏三月九十日あるハかくいへり伏とハ金氣伏蔵の日
なり四時のうつりかはるにおほ生といひて春ハ木な
り冬ハ水なれバかたちハ水生木なり夏ハ火ゆへ
夏ハ火よりハ春木を生すなり冬去りて秋の金
なりハ金生なりたゞ秋ハ金にして夏の火よりハ
火剋金にて金ハ火の伏すなる故に庚日をいふより火
よりて伏する庚を金なり三伏といふは夏至の後
第三庚を初伏とし第四庚を中伏とし立秋の後
第一庚を末伏とす是を三伏と云是四十日経て
節する勝の大寒の難をさるなり　歴象秋に見えたり

梅雨あがりて後書を日に曝すべし新しき表
紙をもつて作す帯縄に結びて曝すは表紙を損ぜず
天気好日なりとも土用にて一日に一度なるべし朝より晩
し午未は収む晩すは暴風の変ありてや損ず
むべし屋下にて曝べて熱をさまし一夜置て収
朝霧に沁む也書をと曝すに一家に多く曝すべう
らは暴風の其恐あり又多くれは家鼠厭ひ
読くらべと用ひすも書をとるこ毎ふに依り損壊
あらは修補し表とを糊ひ綴じ箱の
うちへ櫃中に納函に否とせしめて蓋を閉べし

屋中に久しく曝さんよりかくせよ烈日に一度曝
したるは虫そなは湿もふくしく数年久しくさらせ
ぬとも止まる書の損壊なし古人も書を納まさらせり
くりてありもさる也ありの表紙を表装するとよ
も後世人まくらへの居蒸の風を守古人書を売
書に多く蒸香を用ふ蠹をさく今の七里香也
也なり
紀七里香ハ山礬なる也く芸ハ又苧なる也芸乃香も
紀香の蒸よ似たりと云ふ本今和俗いふやの蒸く云ふ
月よ細なハ防やりて紀香とやうて方なるへし又麝香と書厨の中よ入置ハ壹蛀紙
防く一法よ樟脳を用ゆるも又よし
図画書籍なとも一時伴はよ脳込べし气を防ぎ蠹虫

浸紙をこの上に置き縄にかけ年に幾日
かゝ久しく晒すべし陽晒のうへとかすべし蓑
とさゝすべうしひをもつてひくなり紙をあくひろうさ
たるとあつべし 此よをき方と紙をすべこれを
此四ことれい云ものなり 遠を八歳より四月の月梅雨の初に書
ちさと知りひ晒図衣服をハ梅雨の初に書
梅雨色ていすてゝ濃墨よりまされてひいろものをいり
中書多をを布ものん布とおもひて中間ちうつ晒日無
晒すべし久しを晒すべうす布に物の藝をえ
て後墨日取べよ紙
衣服をも晒すべし定紙を久しを干べうす又黄緑紅色

ものの色たがやうの物ハ日に晒べうすこれと晒せそ
ゑうの物ハ梅雨の初に書 衣服のひて色つきたるとい
ふ所の所よりひて洗べし 痕ちゝ桃枇のさねを
すりて細末して洗へハ痕自ら出 屏風襖用よ
ち梅雨よりかびちゝ衣服とハ梅雨と書して洗へし
あり又暑気の初ハ凡衣服の暑よ濃ちとい者
紙ハ洗と細末し 椹葉と第一よ合せ名づけ
ひ紙うう多温湯よて出べし てよくもち絹ち後
洗のくし又新天葉とちく編のけ出ち布紙
多くとれハ能去又白椹をとすり出て洗てもよし 油よ

あられしら衣服といふ濁石天地粉各等分を末にして
紙にて包み又紙にて包みて自然又
汚しらかす坪粉とひ移りなけ樂屋汁にてこれを
のをいとれいそちよし又寒さと用ふ洗てもうし濡
さけ出て白衣服と洗ふい書紀門撥等分を合
研磨して洗ふ白衣と拭く浄く洗へい能蔵の三
汚しら衣服といふ冷水すくなくへい蔵又白衣と洗ふ
て蘿蔔乃黄汁ふ又い蔓藩を細末して水に
いれて洗へいかくなり　仙人丹家忍秘
新三黒しら藥燈とも線に包おりしらとひしら夜

見ふあてく晒へしさざ波さら藥いをもくに日に平にて
千金方にいとく藥とさいく日に平にておられ藥
うもとくなら有まり市間用ひる藥ハ熱日なり
新花墨に入ふとく紙に用ひ平紀ふ
又新すへし年を為れを新しさらく九數乃
藥をめしとへしもとく元世代人藥と書に貯へ
漫とれしら藥沈たらの事を志へ次藥を花人を
教ひ病をいひ拭るれい書にて收あたく人事
乃ぬきぶりをしてして拭と為の庵に世をもくの
へかくなら新鏡を多く他を藥とへまくと洗のあく

はとくあり　重くしめしとれハ久しくまてとも
うせハ是重とハ[illegible]乃良法なり　地黄白芷黄芪
羌活川芎　猪苓　黄芪　甘草　なとハ時ハ暖ざれハ虚熱
なりて和ちりて[illegible]ちくなるなり　乳香
もくなり　也なり
蒸地を蛭へ　さるものハ　ちくハ暖とへしうすれハ松ちし
ちら和れ　熱ハ　ちよ　脳ちすれ　重とハ日ハ暖へうすれ
風下乃壁に　熱ちく　重へし　弟とも　綿ちくわ　ちく
ちようけ　重へし　ちく　蒸ゆ　ちとハ　ちがく　日ちゆと
へし　ちれハ　ちれハ　熱ちむ　弟乃　熱を　ちく　ちら　黄ちれ

熱中　黄ちハ　五倍ち　熱ち　蒸ちて　黄湯ちて　黄ちれ
弟と　收ちる　ち　地ハ　黄連の　蒸湯を　ちく　柏彩と
湯へ　弟郎と　ひ　ち　牡ちと　ちく　これと　收む　久し
ちと　絶てを　姙す　ひ　ちハ　椒と　黄連と　蒸しちれ
汁ち　ちく　柏姙　黄と　ちて　弟ちと　湯を　ち　又ちと
潛極　熱ち　ちる　ち　ちり　又　進乃　汁　黄柳の　汁ちよ
湯して　ち　重て　を　姙す　又　秋乃　月　弟　蒸ち
樹紙と　入　重ハ　姙ハ　ち　弟と　汁ち　ハ　黄湯ち　ちり
ひ月　ちれ　ちく　蒸して　紙　綾ち　ち　黄と　紙ハ　ち　ち
へハ　一　宗　絶て　を　綾す　ち　農　黄　椒　蒸ハ　ち　ち　ち　ち　生

魚類食なしと弁ゆつりさけてときい抽せしを
月令廣義よりもる也うつ又青豆を用とはるくの麺を
うどんのごとくこねくゝ間とうすゝ中つゝこの中へ入
置いくしてて搾をしい麺を作りて食べしを
茶碗茶椀を見てうつ又麻雪水を貯置こうつ多用
と深しこ置い搾をす

六月土製したる茶とをとけい味をやく煮て
牡蠣をく方の酒も又ちりとてうよつきいと絞さ
ぶ酒と合せく丼の中へとるべし座のかゝるに
ひしかをとはぶ土製をしくしくけるを絞きし

酒をかくれてくをへし
法月山椒を迎ゆ取ると多く使用へし山椒を花
取ると多く実時重へし赤紫時分に取て晒て
よしく又炭をを実貯へし
果瓜と多実を蒸へし腐を法へし
○乾瓜とうらゆる法　瓜とこんまりかとこと長い
瓜乃岸まれの円八九分ゝ塩と入一夜置しとうけ
翌日元ゆしうゆ中へ
久しを和すへうらへし日くくくくなるを法
法へくへし

○瓜と糟漬のしかた　世俗に奈良漬と云瓜と云

みなもと瓜を丸ごとくらをこそ取てあら氣

のなかにやうにかえり瓜の片はしれの間に塩八分ぬ

かと入瓜ばかりつくるなら分量をはかり桶に入すくをとり出

うけ二度切たる瓜をしほけりてあらひて塩け

のかるく成まるく日よりさく瓜に糟を多くぬりは

せて瓶に入なしくて瓜のつきあはやうにしてとれ

ぬの塩と重ねおりしかるこくに至なり糟にも塩ぬ

ませてくらし　大抵糟七升に塩五合ばかりとまぜてくらし

糟多く瓜をくなりたがの瓜多く糟すくなくなれば

俗の瓶にすに瓜をはくし瓜おかをとつくるなかう

まてといつり瓶のはしりに風ひかぬやうにあるをして上を

赤土ぬりぬり蓋し　櫛にひろきゆく瓶の口を

ふたにつけるくるしく桶よつまいてとをさ

ぬるとよくふたくしく瓜ハふれくるつけくつきる

くるしく　豆腐かすにて一二度塩よつける重物と

なりうけくけと面糟よけてれハ糠漬なり

瓶蒸なすと平把ら　武塩漬して貯置へし

○瓶瓶の貯法　好天氣とうくひゆくりと上皮と

ふくりとして樽よりはくしちと者うすくぶまれて

[illegible]て縄をうけくゝりひるをり[illegible]
天竺あしくいたのごく味よく入天氣好日五升
縄よりきくゝりひしへし能ひしる時壺みこと入おもめ
重へし大氏こくゝりて後沸湯をうけこゝ入せい
[illegible]氣泡なると出とも味おそし
○[illegible]麹の製法　麹を大片に切塩をつけて地をし
くゝ重いつりてもはなれ[illegible]て後つか
ゝ重へ納重ねり味噌のごとくす毎朝[illegible]
○乾蒸の法　もち米を蒸これなを去二升ほどて
て平重[illegible]ひしくひしくして[illegible]

[illegible]加へ[illegible]
○紅豆塩の法　米糠を塩四升と合こゝ
ゝ重ねと熟こゝ漬をけいくゝ搗せす新
ゝ月醤油[illegible]
○醤油の製法　大麦　大豆　塩　各一石　水　二石二斗
煮てつる　先大麦とあつふく粗白ゝ[illegible]
石臼ゝ引ゝ大豆と事爲大豆のこゝ煮て大
麦粉とうきすて麹ひろ事去ゝ入麹と
なす麹塵の法　右二石二斗の内塩

一石ほどの大釜にてよく煮る事塩湯を大りたるの
しらやをひたしてあつまりさかとなる時麹を
他り入ありさめてもよし他り入るよりよく拌初より
麹に水をあり他入て四十日ばかり過て後
間を外へ出すあり他入て四十
日ばかり過てよく粥と八へし右麹を水にて
よく八年入粥を煮て塩壱斗入よく拌せさせ冷
時大桶に移し麹を入るうさて日数三十日ばかりへく湯と
ともにくるくるまぜ桶のそこに穴をあけ桶
に入るくるりもすへし上すい中と毎日へし初

作りの日より九七十五日ばかりたつてはこれを
流し去り外へ出す後美味掛しなるを昆布と切て入豆八
味よくなるなり

○ひしほの製法　大豆壱斗　大麦壱斗　塩壱斗　水壱斗
麦八なりかとなるくつきたる豆八蒸て引り皮
とる麦ばかり少しもせきて中へ入麹を加
たる時水と塩とつよく煮てさまし瓶に作り入る
作り入る後日を経日にして味なる時見へし瓶の
口と紙をもつて覆ひぬきさりやうにすへし去りされて
味よくなる事なり麹に入るを黄河金といふ

とくとくに籾の口をとをしく開くべしよし

○濃多紙豆の製法　豆豆少麦粉少麦先豆豆

とうそ豆とうく煮熟し少麦の粉と交し去て

麹入麹をすりうすさて水六升に塩二升入て能煮て

桶に入さうし大豆麹をとりこみて塩汁の内に入て

蓋をし生姜山椒陰干なとこまかに細切て是

を麹と一所に塩汁の内に入てよくかきまして

なをけ豆は塩けうくとをまく豆を敷の上に

て八日目にとりて味をくらべ味噌を麹と

まぜて壺に詰て蓋に詰を置へし

○又納豆の法　大豆三升大麦三升塩三升大豆とうそ

豆とうく煮て麦をすりうすにて粉にし大豆と麦の

粉を混ぜ桶に入て一夜置次の日丸おし

大豆に入かしに麦の粉を混ぜ後塩と入水八升入て

よく入て七日目に壺に詰置度さん女う大豆の上に薬

用朝麻薄皮を入三日目に坪にとりけく置て九日

目よりて又坪にとりけく毎に日にあらためとりかへ

○金山寺麹の製法　和州金山寺の製也　大豆一升にて

引き皮と去麻と細と切へし大麦米

能煮て冷まして家潔し大麦と麻稈

乃天至て一ツすつて蒸し熟したる所細末の麦粉
を拌世土器よ入弱世て麹塵の分
へき一日初に苏 蘇 白瓜 これを青瓜ともいふ 極瓜
合古蘇 瓜 と瓜 合乃塩よ合せ桶よ入ゆとうけ
一夜重明りよりかゝるもとれ麹をひゝて瓜苏をと
物りをかゝませて桶よ入てとゝて世ゆゝとうく
ケ重毎日一二度ウ紀ませ十日許過て後蔵者
ゝ椒皮ゝ椒種蓼 蓼 藍 と世ゆとよゆく拌又あの
ゝくゝゝとゝて重ゝとけ重毎日ゝくませ七十日
過て用へし三四十日よ及へ酒味つくり後よかへ

立ゝ酒いくゝ者ゝよゝ乃ぬゝよゝゝ
○第年醪の製法 醪と酒と物りゝ合せ壷ゝ蓋
醪ゝ口と物りひ月土月乃中壷ゝ物ゝ小重
実日よ晒ゝ七十日をてゝこれと用のその
たゝと酒と水と米かつゝ入毎度如此れいゝ用て
ゝ者ゝ方ゝ醪ゝゝふゝゝ又菖蒲乃葉と能てゆく
ゝて入ゝいゝ茅蓋と物ゝゝゝ菖蒲醪ゝゝ
日和ゝ時桶よ換壷ゝたゝ墻壁と修理とゝゝ又
酒桶乃宅ゝ昇ゝゝ井と清ゝ泥と去ゝ
但井ゝ入ゝゝ世ゝれいゝ氣ゝゝよゝなゝ

元刀細槍七刀鑓なと異月より度々ぬくいされい編まひ
花常八門をもりくぬくしてくしひ月名稱る物
なりとなりくし
五月故事と去法　菖蒲　黒木蟹仁　二ケ　雄黄　引研　竹筒
細末して蜜にて煉丸とし長寸
必用より丸ずつ又龍の骨と燒い蚊時死うるきれ
骨をよりとべこ川魚の骨い焚えい時蚊と去又
浮萍と蓋流とと燒てをすしと月合唐義より丸え
しより又千金月令ないめ月より浮萍と取く蚊平より
雄黄より丸ずく焚えい蚊を辟と去るなりより月

六月四日の浮萍と乾燒し仮黄丹と丸これより
漬し又晒し又漬すれ去るる数度して後未して
香とする燒之大より蚊蚋と去と居家必備ると見てしりえ
麻の葉とけるよりけいく蚊をさるる物ある或
毒より丸えしり和名より八櫛の末とたくこれ又く蚊と
去るものなりやし蚋ぞるをかやりの末とりこれ
なりへし古今集色の歌より
夏なれは　やとに寄るとあるつまは出れいれまてる
夕ひをえるなん　清音大集蚊の物より
宋図　拝廣摩雑　去蚊蚋　蚊蚋使山陰

○又蠅多くわいてくるなるを粒糸なしてのべよかく
まいはまくるとも細蛇蛇蛇ふ蛇多き事
ふい前兆の事と虎ふ虎ふ蛇ふ蛇ふ
つまくる虎ふ虎ふ虎ふ虎ふ虎ふ
夏月の万世人異常小あて〜五月五日夜中ふく僧ふ
病ふ死する事ありこれを中暍と暍死と云
これを霍乱といふあやまりなり此病人とい水をひ
やとくうしひやひやとい所ふ死るものあり温湯とな
めくいまくるなるべし〜豚の骨とあるべし〜
遠中まて死〜人事をなしかるい故上の藥をとる

豚腹の骨よ如き人をしてその上に置せしめ又薑と
大蒜とつき烟り〜熱湯まて送下せい即活それ後
薬とあくへて保養とへ〜
夏月万天氣横ふくく清汗成漿猝力昏迷ふるさ
生豚数を服すへ〜病ふ中ふいて病ふ治ふく清暑益氣
湯参芪益元湯等ふ病ふ治ふ
ふく生豚数ふ代へ〜と方書ふ見えてう
黄芪 寒水 人参 白朮 当歸 各一分 五味 陳皮 茯苓 後続ける者ハ
白扁豆 各一分 五味子 五味 麦門冬 一分 甘草 五味 右十味成
加 茯苓 一分 神麯 一分 黄柏

元慶の時相撲を保昌して濃て紅油とるなかれ
寿世保元にいへく六月茅の入房勝仙食膏盲又漢土人
のいへく夜間激乳間より伏し毒虫を蒸すんのよまり
せく風よりあつり冷酒と食ふあり暴酒は毒を生ず激
暖なる酒と食飲して大は飽るなかれ
鬼葉記をよたものはよりてもあるとて淺ましい毒を洗ふ
て水りをよ淡くし屋日常の甚しき時水とるべけい
冷熱和適て新井なる柿ると月令廣義に見えたり又
老圃の云ふ暖を端午さめ用ふ時あると淡へて次つまる
淡くすると但暖ふ初るく淡へ

月令廣義にいへく六月に柿橘に水とるべし紀土とい茅
の原羊の蜜と蜜へ小麦多し
秋の法風吹て涼しくは何うしても暖となす柿橘と
鬼くし茅屋の柿を喫くとへし又樗程を仙へし
八月菲と食へ目と賢す羊肉とへ茅屋と傷ら
聖鳥鷹鷲葉蔓と食ふと又生姜と食へ水瘕
となる犬の肉を喰るれい紅毛人となす冷食と岩
用し冷水生硬果油臓酒食とる食するなかれ
凡莫炒燥菓の屋味宮宜くあく用へし 月令廣義
元慶の月酒瓜と食するなかれ瓜のあるへて沈

ものハ大に毒あり　月令廣義ニハ又いそく双
蕎ハ凡人を救　又油餅と共に食うべし地鄭れ
咸志ニ瓜ハ白瓜と白く輝と食うべし後
白瓜と食べし　又麝香をもって瓜と浸せす又石首
魚と魚食すべ　ハ鯰瓜と浸して水とあらと如空
六月八六候中一溽風至中三蟄乃
学智　六小暑八三候　中四腐草為螢中五
土潤溽暑中六大暑　六大暑ハ三候
小暑屋六中刻二十分　長三十九刻四十分大暑屋五十
八刻二十分　長四十一刻四十分月令廣義

土用　又土王ともいう
ハ木時　ハ火時　秋ハ金時　冬ハ水時
ハ乃ち土ハ四時に旺ずるなり
故ニ完れる信ずくしてなり氣なくして四時乃
物なり辰未戌丑月の末ニ寄時なる者
十八日一年ニ七十二日なり此七十二日とのう
ちハ火金木水を又各七十二日づつ
一年ニ土ハ木と始ること有ハ土
用ハ春夏秋の土用ハ土衰老して盛なり冬
乃土用ハ水と共に旺ずるなり故ハ土

用ひ宮こと金とを用ひ五行説に土は中央にあり五色に黄色
の土用とあり四季に土をあてはめて土より金を生じ
火より秋乃金を土より生ずるなり赤は月を火金の
母なり又一説乃中央に置るれい中央の土一金を
生ずる説あり乃席をなひ乃を赤土用金を
黄色は中央の土とのそり 祝国俗土用の月日を
いふ事あり土をれと
とあるこれその説なれい
俗説に六月土用に入日蒸及赤小豆を食ハ疫疫を
除くと今の人おくとも事なり それハ源氏物語
乃蓬生に見えたるこそねちけさうやくなるすし

作り家紙に作るまきやくを蒸なりと作れハ作り
へるなり土用の内なり土用に入ると
五月に中旬より蒸頭のもとく蒸人四月節食五穀
の磨麗氣猥薤蒜韮薑也又腑腸芳に元日及
人日腐に小豆を七枚と香を疫疫を除すと作り
これらの説初のまなひ事と見えたり
事と作人あやまりて六月に入るなり行地獄乃
人に見あり
菓子六月土用乃中に搗くなり
六月土用の内に鼈とり塩を付粉を入れ
泥濘下

血乃久しくやまざりしかば
衰えたる病人は男子能為羸と獨り言ひ
さまざまうるさく煩てよし

日本紀略附紀卷之四畢

京都帝国大学